# RIMS年次大会 RISKWORLD2023に参加して

リスクマネジメント協会理事長／RIMS日本支部支部長／明治学院大学名誉教授　神田 良

コロナのため、ここ数年、参加できなかったRIMSの年次大会に久しぶりに参加した。今年はジョージア州アトランタ市、ジョージア・ワールド・コングレス・センター（GWCC）で開催された。その名が示す通り、大規模な会議場で、例年通り、ここで世界各国から集まったリスクマネジャー、ブローカー、保険関連担当者などが、自分たちの知識、能力を強化・向上させるために勉強、議論、交流に勤しんだ。

## 世界最大のリスクマネジメント学習の場

RIMSの発表によれば、今年の参加者は9,000人で、われわれ日本人も含め世界70カ国から参加している。並行する展示会では、400社がブースに参加し、自社の最新の製品・サービスを説明するだけでなく、得意とする分野での最新の情報を提供している。参加者は、もちろん大会で提供される多くのセッションで勉強するとともに、こうした展示会でも、広くリスクマネジメントに関する業界での動向についても学んでいる。（**図表1**）

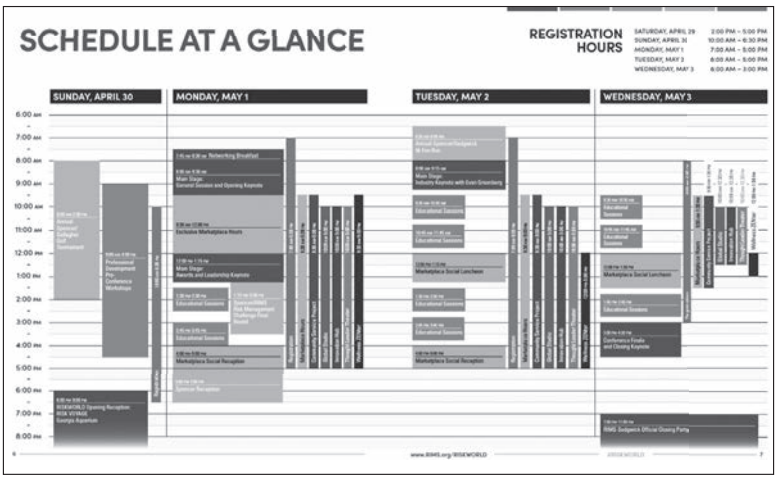
大会は4月30日の夕方、会場近くのジョージア水族館で開催されたオープニング・レセプションから始まった。レセプションは形式ばったものではなく、会員が三々五々集まり、立食で旧交を温め合い、また新たな人脈づくりのためのネットワーキングの場としても活用している。RIMSはリスクマネジャーの集まりであり、ともに知識と経験を共有する場でもある。大会中はランチ会場も用意されており、RIMSはこのようなフレンドリーな場での交流をとても重視している。ちなみに、これらの食事は協賛各社によって、支援されている。

翌5月1日から3日までが公式な大会であるが、29日から30日の夕方までは、リスクマネジメント専門家に向けた大会前ワークショップがバーチャルで開催された。リスクマネジャーがERM、キャプティブ、リスク取得意欲（アペタイト）、データ分析手法などを学べるだけでなく、RIMS-CRMPについても学べ、試験も受けられる。

また、リスクマネジメントに関心を持つ大学生に向けた教育セッションも用意されている。リスクマネジャーが専門職の一つである欧米では、キャリアパスとして、リスクマネジメントを考える若手の育成にも力を入れている。RIMSも特別の資金に基づいた学生教育にも注力しており、大会の場においても、世界の大学でリスクマネジメントを学習する大学生がグループで発表する機会を提供している。選考に基づいて、旅費などを支援して、大会で発表させ、その中から優秀賞を選び、表彰している。もちろん、彼らは大会にも参加でき、最新のリスクマネジメ

図表1　テーマはレジリエンス

- 4月29日～5月3日、アメリカ・ジョージア州アトランタ市ジョージア・ワールド・コングレス・センター（GWCC）
- 70カ国から9,000人が参加、400社のブース（Market Place）、300人の発表者
- 29日～30日は、学生向けの教育セッション（Online Course, Virtual Workshop）
- 30日夕方にオープニング・レセプション
- 5月1日～3日　イベント




図表２　並行したセッションを選んで、勉強

- オープニングはジェニファー・サンチャゴ理事長、ゲイリー・ラブランシュ CEO のスピーチからスタート
- イベントは並行して、多くの会場で実施され、参加者は、自分の関心に合わせて講演を聞く
- マーケット・プレイス（展示会場）でも、講演があり、Thought Leader Theater, Innovation Hub, Global Studio といった特設ブースがある
- 各講演は、原則20分、10分の休憩（1時間の特別セッションもある）
- セッションは分類されて、関心に合わせて選びやすい（Career Development, Claim Management, DEI, ESG, Cyber and Technology Risk, Strategic and Enterprise Risk Management など）

ントを学ぶ機会も与えられている。残念ながら、日本の大学からの応募は今のところない。もちろん門戸は開いているし、実際、応募を呼び掛けている。英語での発表で、事前に発表内容を送り、選考される。次年度こそは期待したい。

提供されたセッションは150以上で、いわゆる教育セッションと呼ばれるRIMSの資格に関連する内容のものがあるだけでなく、会員が研究成果を発表するセッションも多く、それ以外にも学べるセッションもある。会員はここでの発表が自分のキャリア上での成果として、誇りをもって表明できるものであることから、積極的に挑戦している。

セッションは協賛会社が支援しているものもあり、それぞれが割り当てられた部屋で、テーマに統一感を持たせている。できるだけ多くのことを学びたいという会員のニーズに合わせて、それぞれの発表時間は20分がほとんどで、移動時間は10分を想定しているので、多くの参加者は30分ごとに、自分が関心のあるテーマに基づいて、セッションを選び、新たな知識を得ようと忙しく動いている。

400社が自社の最新の商品・サービスを展示、説明している展示場では、いくつかの発表セッションが特設された場所で展開されている。こうしたセッションは、「思慮深いリーダー会場」「イノベーション・ハブ」「グローバル・スタジオ」と名付けられたブースで、その名に応じた内容の発表が、同時並行で常に繰り広げられている。いずれもオープンな会場で、会員は自由に出入りでき、参加できるようになっている。（**図表2**）

今回、大会に参加して気づいたのは、大会資料の配布方法の変化である。事前にネット上で登録して、参加資格を示すネームカードを自分で印刷するようになっているだけでなく、かつては大量の紙で配られていた参加者への資料は、携帯にアプリをダウンロードすることで、スケジュールをはじめ、すべての資料が閲覧できるようになっている。これらの情報は随時更新され、リアルタイムで必要な情報が得られるようになっていた。環境の点から考えても合理的で、時代の変化を感じた。

## 新たな リスクマネジメントの 船出に向けて

5月1日、8時30分から開会セレモ

開会セレモニー（写真提供：JX金属株式会社）

会場の展示ブース（写真提供：株式会社リクルート）

RIMS日本支部の参加メンバー（写真提供：JX金属株式会社）

ニーが、メイン会場で始まった。冒頭、今年度の理事長であるジェニファー・サンチャゴから、RIMSの新しいミッションについて説明があった。今大会のテーマは「レジリエンス」である。これまでにはなかった多くの新興リスクに直面している組織は、より体系的、効果的なリスクマネジメントを必要としている。しかし、従来と同じ考え方に基づくリスクマネジメントでは、これに対して十分には対応できない。過去の体験や知恵にのみ依存することができないほどに、変化が激しいからである。新たな状況に対応して、皆で協力して知恵を絞っていかねばならない。多様な新興リスクに遭遇しても、組織の強靭さや回復力、つまりレジリエンスを強化することで、リスクマネジメントを進化させていくことがリスクマネジャーの新たな役割であると認識している。こうしたレジリエンスの強化に向けてRIMSは新たなミッションを掲げ、新たな方向に向けて進み始めている。

これを受けて、昨年6月からCEOに就任したゲイリー・ラブランシュが10年間の戦略計画とミッション・ステートメントを詳細に説明した。リスクマネジメント専門家は組織戦略と実行を推進させ、よりよい組織成果を生み出すうえで、より重要な役割を果たす。そのためには、取締役、経営幹部や上級管理者だけでなく、それぞれの機能別部門の専門家、さらには多様な視点からの貢献が不可欠であり、こうした協力関係を築き上げていくことも求められている。RIMSとしても、より広い範囲に及ぶ貢献を目指して、他の機関や組織との連携も図っていくとのビジョンも示された。

最後に、テレビシリーズ、スタートレックでカーク船長と乗組員が危機に直面し、それを乗り越えてきたことを示唆する場面の映像をスクリーンに映し出した。これまでもRIMSはリスクマネジメントのコミュニティのための探索と発見の旅を続けてきたが、また新たな時代に向けて、乗り出して行こうとのメッセージで締めくくられた。

## 人材リスクに立ち向かう

毎年、大会では、大会テーマに応じた基調講演も、目玉とされている。その中の一つ、初日のオープニング・セレモニーでは、米国人的資源管理協会（The Society for Human Resource Management: SHRM）CEO、ジョニー・C.・テイラーJrが、同協会で実施した調査結果に基づいて、組織レジリエンスでキーとなる人材の活用について、その知見を披露した。彼は、『リセット：激変時代で仕事するためのリーダーに向けたガイド』の著者でもある。

コロナ禍によって、仕事の在り方が全く変化した。リモートワークが導入され、オフィスで一緒になって働くことが制限された。この経験が働き方に対する人々の考え方を大きく変化させた。こうした変化が、組織に対してどのような変化をもたらしたのかに関した調査結果に基づいて、組織の要となる人材への対処について、彼はヒントを提示した。

日本と同様、アメリカでも少子高齢化は大きな人材リスクとなっている。そこにコロナが追い打ちをかけたのである。すでにアメリカでは「大量離職時代」と言われて、多くの人材がよりよい職を求めて転職している。転職によってより高い職位と金銭報酬を得られる確率が高まるからである。転職の魅力と職場に縛りつけられない働き方が、潜在能力の高い人材の流動性を高め、これが企業にとっては大きなリスクになっているのである。

しかし、調査結果によれば、離職した人達の多くが後悔していることが明らかになったという。隣の芝は魅力的に見えても、いざ隣に行ってみると、思ったほど魅力的ではなく、転職を後悔しているというのである。そこで、転職した人材に対しては、定期的に接触して、再度、自社に呼び戻すことが企業にとっても、個人にとってもメリットがある人材確保手段であるというのである。

また、われわれは多様な人材を活かすダイバーシティ・マネジメントというと、ややもすると人種や性別などに注意が向きがちであるが、多様性はそれを超えたところにもある。労働力不足は高齢者雇用も促進させていることから、人種や性別を超えた世代での多様性に応えることが、その本質になっている。一般的に言われるように、世代ごとに、労働に関しても含めて、価値観が異なる。世代別

に労働者層を見ると、ベビーブーマー、X世代、ミレニアム世代、Y世代、Z世代と、異なる5世代が一緒に働く労働環境に、われわれははじめて直面していて、むしろこうした多様性に目を向けて人材を確保することが求められている。そこでのキーワードは、それぞれのニーズに合わせた柔軟な働き方を提供する柔軟性と、当該企業で働くことの意味を明確にする企業文化との整合性であるという。金銭的な報酬だけに頼るのではなく、こうした大きなトレンドを考慮した人材確保が、現在の人材リスクに対応するリスクマネジメントに求められていることを認識すべきである、との提案である。

## 日本支部代表団として

RIMS大会では、北米とメキシコ以外の地域からの参加者に対して、10人以上のグループでの代表団を組織すれば、大会参加費を割り引くという特典を用意している。そこで、RIMS日本支部として法人会員に呼びかけ、代表団を組織した。結果として16人から成る日本支部代表団が編成された。グループメンバーは現地集合、現地解散ということで、事前に日本で顔合わせをして、大会当日、現場で集合した。代表団のメリットは参加費割引だけでなく、RIMSが確保している会場近くのホテルに優先的に予約できることもあり、交通の便などを考えずに参加できた。

さらに、RIMS本部に事前に交渉して、大会二日目、ジェニファー・サンチャゴ理事長、ゲイリー・ラブランシュCEO、そのほか主要事務局スタッフと会合を設定してもらった。対面で会うことで、互いに知り合うことができ、RIMSスタッフとの個人的な人脈作りにも役立った。

会合では、RIMSの基本方針などを理事長とCEOから直接聞き、質疑応答もできた。デニス・オソリオ資格・教育担当部長は、日本でのCRMP資格の可能性について前向きな姿勢を示し、RIMSの持つ教育資産の日本語化をさらに進めること、さらにはRIMS・CRMPの日本語での試験の可能性についても議論した。団員からはERMの組織的な展開についての質問が投げかけられ、ERMに特化した大会への参加の可能性についても言及され、RIMSの中核的なフレームワークである戦略的ERMや成熟モデルについても意見を交換した。

今回の参加者では、エネルギーレジリエンス協議会からのメンバーたちが、グローバル・スタジオで発表する機会を得、また日本で唯一のRIMS・CRMP保有者カーク・アンダーセンもセッションの一つで発表した。

もちろん、大会中、団員はそれぞれの関心に従って、別々にそれぞれ興味のあるセッションで学んだ。私も戦略的ERMに関するセッションを中心に、多くのセッションに顔を出した。それぞれのセッションには、その内容が一目でわかるように、発表タイトルにESG、CTR（サイバー及びテクノロジー・リスク）、DEI（ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョン）、SERM（戦略的・全社的リスクマネジメント）などのトラック名がつけてあるので、選びやすくなっている。私が参加したセッションでは、RIMSらしく、発表内容は実践的なものであった。実際に自分たちが実践して得られた知見を、成功ポイントとしてまとめてあり、実務を担当するリスクマネジャーにとっては自社での活用という視点から学べるものであった。中にはコンサル会社が自分たちのフレームワークを説明し、それを実際に活用して成功している組織の担当者が活用事例として解説しているものもあった。

## 最終日、アメリカらしいリスクに

最終日、順調に進んでいた大会が突然のリスクに遭遇した。お昼ごろにアトランタ市のミッドタウンで発砲事件が勃発。24歳の若者が病院で拳銃を乱射して一人を射殺、4人に怪我を負わせるという事件が起こった。犯人が逃走したため、予定されていた15時からの閉会セッションは中止となった。事務局はリアルタイムで事件の情報を収集し、会場参加者に状況を説明し、参加者が無事にホテルまで帰られるように手配し、予定よりも早く大会を終了させた。

手際のよいリスクマネジメントの実践を垣間見て、会場を離れた。その後、夕方のニュースで犯人が逮捕されたことを確認し、翌日、早朝、日本への帰途に着いた。

RIMSボード・事務局メンバーとの会合（写真提供：株式会社リクルート）